



TITLE:

京大広報 No. 540

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 540. 京大広報 1999, 540: 765-774

ISSUE DATE:

1999-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196571>

RIGHT:



# 京大広報

No. 540

1999. 11



UCLA との遠隔講義プロジェクト開始式典 関連記事本文769ページ

## 目次

### 大学の動き

部局長の交替 .....766

博士学位授与式 .....766

### 部局の動き

故足利健亮人間・環境学研究科教授追悼式 ...766

### 経済学部創立八十周年

記念シンポジウム・記念式典・祝賀会 .....767

日誌 .....768

訃報 .....768

### 紹介

#### UCLA との遠隔講義プロジェクト

TIDE ( Transpacific Interactive  
Distance Education ) .....769

### 文化交流

「英国・ラフバラ滞在記」 武藤裕則 ...770

### 随想

「大学での研究の行方」  
名誉教授 庄野達哉 ...771

### 洛書

「ゴミのもとはどこにある？」 古川久雄 ...772

### 公開講座

- 終了報告 -

超高層電波研究センター公開講座

- 電波でひらく宙空の科学 - .....773

### お知らせ

能楽鑑賞会 .....774

## 大学の動き

### 部局長の交替

#### 人文科学研究所長

山本有造人文科学研究所長の  
辞任に伴い、その後任としてくわ  
やましやうしん  
山正進人文科学研究所教授（東  
洋考古学研究部門担当）が、11  
月1日人文科学研究所長に任命  
された。任期は平成13年10月31  
日までである。



### 博士学位授与式

9月24日（金）午前10時30分から、京大会館において、長尾 真総長，両副学長をはじめ，各研究科長，事務局長出席のもと，博士学位授与式が挙行された。

総長から，各授与者に対し学位記（平成11年7月23日付，及び9月24日付）が手渡された後，総長の式辞があり，午前11時55分終了した。

今回の学位授与者数は，7月23日付課程博士45人，論文博士37人の計82人，9月24日付課程博士33人，論文博士30人の計63人であった。

各研究科別内訳は次のとおりである。

研 究 科	平成11年7月			平成11年9月		
	課程 博士	論文 博士	計	課程 博士	論文 博士	計
文 学 研 究 科	2	1	3	1	1	2
教 育 学 研 究 科		4	4			
法 学 研 究 科	2	1	3			4
経 済 学 研 究 科	3	3	6	1	2	3
理 学 研 究 科	12	1	13	2		2
医 学 研 究 科	12	5	17	4	2	6
薬 学 研 究 科		4	4		4	4
工 学 研 究 科	8	6	14	8	14	22
農 学 研 究 科	4	10	14	7	4	11
人間・環境学研究科	2		2	3		3
工ネルギー科学研究科		2	2	3		3
情 報 学 研 究 科				3		3

## 部局の動き

### 故足利健亮人間・環境学研究科教授追悼式

本年8月6日に逝去された足利健亮教授の追悼式が人間・環境学研究科主催により，9月30日（木）午後3時から5時まで人間・環境学研究科棟地下大講義室において，200人余りの出席を得て執り行われた。

（大学院人間・環境学研究科）



## 経済学部創立八十周年記念シンポジウム・記念式典・祝賀会

経済学部は大正8年5月に創設され、本年、創立八十周年を迎えた。経済学研究科ではこれを記念して、10月2日（土）に都ホテルにおいて、記念シンポジウムを催した。学内外の関係者約300人が出席した。

午後1時30分から「21世紀のアジア経済」と題する記念シンポジウムが、卒業生や元留学生をパネリストに招いて行われた。総司会を務めた経済学研究科の本山美彦教授が問題提起を行い、1997年夏タイで始まった金融危機がさしあたり終息した現在、この危機を客観的に議論できるようになったことを指摘し、またそのような議論に基づいてアジア経済の将来に関して再考すべき論点を提示した。それに応えて、中国人民大学信息学院の趙国慶副教授、タイ・チュラロンコン大学のカムチャイ・ライスミット助教授、中華経済研究院の蘇顯揚研究員がそれぞれの各国経済の経験を踏まえ、現在のIMFと世界銀行が要求している商品・金融市場の基本的開放と政府の経済的役割の縮小という政策が必ずしも個別経済、特に開発途上経済の成長にとって順機能を果たすことにはならないことを論じた。各パネリストとも経済国際化の必要性を十分に認識した上で、その過程がIMFと世界銀行が求めるような全般的で一挙解決的なものでは、特に金融市場において長期的な利益よりも短期的な不利益の方が大きいことを強調した。

以上のマクロ的観点からの議論に対して、LG経済研究院の権赫基研究員とビジコン（株）社長の小島義雄氏は、アジアの経済成長にとってミクロ経済の要因、特に企業の組織構造と国際競争力の問題の解決が不可欠であることを指摘した。権研究員は、韓国の発展にとって閉鎖的で経済効率の劣る財閥組織を根本的に変革することの必要性和、そのような財閥を保護してきた政府の産業政策の方向転換の重要性を論じた。小島氏は、長年にわたるハイテク分野における国際的なビジネス経験に基づいて、アジア企業がその起業力を育てて欧米企業に対抗していくことが、グローバル経済のもとでは必要であるこ



とを力説した。

以上の報告に対して、マサチューセッツ工科大学から客員教授として赴任したばかりのアリス・アムズデン教授は、このような多岐にわたる論点が異なる立場から出されて、忌憚のない意見交換が行われることの意義を高く評価した。さらに、今後とも相互批判的な議論が広く活発に行われることを希望した。

このシンポジウムが経済学部創立八十周年記念事業の一つとして行われたこともあり、経済学部及び経済学研究科の卒業生、現・元教官、大学院生等が参加し熱心な議論が交わされ盛況裡に終わった。

引き続き午後4時から記念式典が行われ、西村周三経済学研究科長が挨拶し、宮崎昭副学長、尹桂燮ソウル大学校経営大学長等による祝辞の後、祝電披露が行われ、午後5時に終了した。

式典終了後、京都大学交響楽団員によるモーツァルトの弦楽四重奏曲が演奏される中、祝賀会が華やかに始まり、同窓生及び関係者が和やかに歓談した。最後に「琵琶湖周航の歌」を一同合唱して閉会した。

なお、記念行事の様子は、ホームページ（<http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/>）で紹介されている。

（大学院経済学研究科）

## 日誌

1999.9.1 ~ 9.30

9月5日 総長，環太平洋大学協会第3回年次会議  
に出席及びオークランド大学，シドニー  
大学，オーストラリア国立大学における  
研究・教育の現状調査のためニュージ  
ーランド並びにオーストラリアを訪問（11  
日まで）  
7日 京都大学主任研修（10日まで）  
14日 評議会  
" 新キャンパス委員会

14日 建築委員会  
17日 同和・人権問題委員会  
22日 国際交流委員会  
" 国際交流会館委員会  
24日 博士学位授与式  
" 新キャンパス委員会  
" 将来構想検討委員会  
" 建築委員会  
28日 評議会

## 訃報

内田 洋一 名誉教授



本学名誉教授内田洋一先生は，9月18日逝去された。享年95。

先生は，大正15年京都帝国大学理学部物理学科を卒業，同大学理学部助手，同講師，同助教授

を経て，昭和20年同教授に就任し，放射学・放射学講座を担任された。昭和42年停年により退官され，京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は，昭和42年から同46年まで甲南大学理学部教授を，同46年から同54年まで京都産業大学理学部教授を務められた。

先生は，戦前は黎明期の分光学の研究を専門とされた。特に，昭和3年我が国で最初にラマンスペクトルの観測に成功された。戦後は固体の分光学研究を展開され，新しい光物性物理学の分野を開拓された。先生はまた，我が国において初めて本格的な真空紫外分光計を試作され，これを用いて，真空紫外分光学開拓に貢献された。

これら一連の功績により，昭和49年4月勲三等旭日中綬章を受けられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（大学院理学研究科）

Uglov, Denis Borisovich 数理解析研究所助手



数理解析研究所助手 Uglov, Denis Borisovich 先生は，10月4日逝去された。享年31。

先生は，平成7年米国ニューヨーク州立大学ストーニーブルック校において Ph.D. を取得

された後，本学数理解析研究所中核の研究機関研究員を経て，同8年助手に就任された。

先生は，可積分系の理論の研究，特に Sutherland

模型の研究や関連した量子群の Fock 空間の研究に多くの業績を残された。Fock 空間の標準基底の研究を完成された直後であっただけに惜まれる。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（数理解析研究所）



## 紹介

## UCLA との遠隔講義プロジェクト

TIDE(Transpacific Interactive Distance Education)

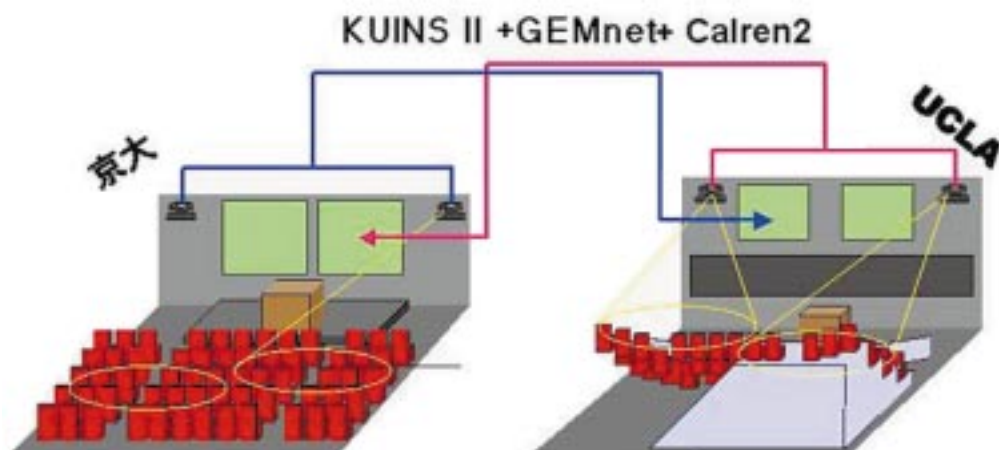
総合情報メディアセンターでは、超高層電波研究センター、高等教育教授システム開発センター、留学生センター、附属図書館の協力を得て、米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)との間で遠隔講義実験を開始しました。実験は、京都大学、UCLA、NTTの三者の実質的な共同研究という形でいきます。実験的に行う講義は、10月1日より12月10日まで、全学共通科目の「物理学概論」(留学生センター：青谷正受助教授担当、週2回、4単位)と「宇宙科学」(超高層電波研究センター、松本紘教授、小嶋浩嗣助教授、臼井英之助教授担当、週1回、2単位)の2科目です。両講義とも全て英語で、場所は附属図書館AVホールです。いずれもUCLAからの映像を利用するという形で講義が行われますので、通常授業と全く同様に京大の担当教官より単位が与えられます。UCLA側でも京大からの講義の映像を利用し、担当教官が単位を与えます。

「物理学概論」のUCLA側の担当者はProf. Robert Cousins (Physics & Astronomy)で、授業は数式を使わずデモを中心にわかりやすく行われますが、毎回、宿題が出て、回答を電子メールで送らなければなりません。「宇宙科学」のUCLA側の担当者はProf. Maha Ashour-Abdalla (Institute of Geophysics & Planetary Physics)です。この講義では、複数の学生が共同でシミュレータを使って惑星を探検するプロジェクトが計画されており、講義を手がかりにUCLAの学生との交流が進められるように配慮しています。両講義とも、質問はWWWのページに

書き込めるようになっており、いつでも質問ができるような環境を用意しています。講義の終了後、引き続き1時間程度回線をそのまま接続してあり、学生同士が自由に対話できる機会を提供しています。また、学生間の連絡用にメーリングリストも用意して、電子メールによる通信手段も確保しています。

総合情報メディアセンターは、UCLAのCDI(Center for Digital Innovation)と共同で、講義で利用されるマルチメディア教材の作成を担当教官とともにを行うことにより、教材作成の方法論、技術論、支援方法などの研究を行います。また、高等教育教授システム開発センターでは、この実験を材料として、情報技術が教授法へ及ぼす影響や教育効果、教材の作成方法、システムに対する評価などの研究をこのプロジェクトに参加している教官、学生に対するアンケート調査に基づいて進めることを計画しています。

この遠隔講義実験を支える技術は、ネットワーク技術と映像自動取得技術です。京大の映像は、デジタル化されて圧縮され、京阪奈のNTTコミュニケーション科学研究所で、NTT社内実験用イントラネットであるGEMNetにのりNTTアメリカ(シリコンバレー)まで運ばれます。そこからさらに、カリフォルニア大学バークレイ校(UCB)を経て、カリフォルニアの大学ネットワークCALREN2を介してUCLAに届きます。この間の映像の遅延時間はわずか0.3秒です。UCLAからの映像と音声も全く同じ方式で圧縮され、逆の経路を取って京大へ



送られてきます。

遠隔講義を行うために、総合情報メディアセンター研究開発部門が日本学術振興会未来開拓事業の一環として行った研究成果である映像自動取得システムを双方の教室に設置してあります。このシステムは、原則として動いているものを映像化するシステムで、講義においては、講師がよく動くであろうとの仮定に基づいています。したがって、写りたいときは大きく動けばよいわけで、質問がしたいときは手を上げるとカメラが自動的に写してくれます。

その反面、例えば、居眠りをして船を漕ぎ出すとその様子が撮影される可能性もあります。遠隔講義システムとしてはこの機能だけでは不十分ですので、動きが検出された場所から、さらに音声感知できるカメラの開発研究を進めています。

今回の共同実験を通して、情報メディアを利用した教育のあり方、教育に使える情報技術の研究をさまざまな立場から進めると同時に、学生レベルでの国際交流を進めていければと考えています。

(総合情報メディアセンター)

## 文化交流

### 「英国・ラフバラ滞在記」

武藤 裕則

本年3月および4月の2カ月間、文部省短期在外研究員として英国ラフバラ大学(Loughborough University)に滞在した。工学部土木工学科環境流体工学講座のProf. K. Shionoのもとで、環境に配慮した流れ場の数値シミュレーション法に関する研究を行った。筆者にとっては、博士課程学生として3年間留学したブラッドフォード大学(University of Bradford)(1992年4月～1995年3月)に次ぐ二度目の英国滞在である。

今回滞在了ラフバラは、イングランド中部のレスター州に位置し、首都ロンドンからは北へ約180km、列車で約2時間の距離である。ラフバラは、大学を抱える他の英国の都市に比して非常に小さく、人口は約2万人程度、実際都市の格としては市Cityではなく町Townである。近在の大きな都市として、ロビンフッドで有名なノッティンガム、英国の中でもアジアからの移民の多いレスター、そして英国第二の都市バーミンガムなどがある。

ラフバラ大学は、理工学系、社会科学系および人文科学系の26学科よりなる総合大学で、1966年にそれまでの高等技術専門学校から大学として認可された。教職員・学生合わせて1万人を有する英国内でも有数の陣容を誇る大学で、なだらかな丘陵上にひろがるキャンパスは英国一の広さと言われている。

大学はまた、スポーツ活動に対する熱心さ、能力の高さで知られ、国内大会では上位入賞する選手・チームを多数抱えている(休日の国内旅行の時等、現地の人に“ラフバラ大学で勉強中”と言うと、“何のスポーツだ?”と尋ねられることがしばしばであった)。敷地内には整備されたラグビー、サッカー、クリケット、ホッケー等のグラウンドやスタジアム付きの陸上競技用トラックが並び、“広大な”“緑の多い”キャンパスを演出している。筆者の受け入れ先である水工学・流体力学の分野では、Prof. K. Shiono(環境流体工学)やPIV(Particle Image Velocimetry(粒子像速度計測法))で知られるDr. P. Behrouzzi(航空工学)の他、開発途上国における水問題を取り扱いアジア・アフリカ諸国からの留学生の多いWEDEC(Water Engineering and Development Centre)等が有名である。

今回の滞在は2カ月ということもあって、大学の寮に起居することとした。英国の大学の寮と言うとオックスフォードやケンブリッジの学寮が有名であるが、新興大学のほとんどではそのようなシステムではない。ただし、原則全寮制である。寮の建物は大学に対する貢献者や寄付者の名前を冠し、またそれらスポンサーの好みに従うのか、クラシカルなデザインからモダンなもののまでが混在する様は、英国

における普通の街並みと同様である。寮は大学の敷地内に位置するので、講義やゼミでの移動も簡便・  
・のはずが、上述したようにラフバラのキャンパスは広く、学生にとっては自転車が必需品である。英国はイングランド西部の一部を除いて小なりと言えども起伏が結構あるので、通勤・通学用自転車を他都市で見かけることはあまりなく、多数の自転車というのは珍しい光景だと思われる。大学の敷地内にはこの他に、銀行、病院、書店、食料品店等から果ては保険・旅行代理店やパブまでが大学の管理する建物内にあるため、特別の要求がない限り学生生活は文字通り敷地内で完結する。これらの店の運営やテナントとの交渉には学生組合 Student Union がかなり大きな力を持っているようであり、例えば以前訪ねたときにはなかった大学～鉄道駅間の定期バスは、これも民間交通会社と学生組合との交渉によって最近運行されたそうである。

海外滞在のメリットとしては、普段接することのできない研究者と討議し、成果を交換しあい、今後



ラフバラ大学ヘイツラーリック・ルトランド寮

の発展を探ることはもちろんであるが、異国のちょっとした文物や風習からヒントを得たりリフレッシュされるのもまた事実である。筆者にとって慣れ親しんだはずの英国は、今でもそのような存在であることが確認でき、巷間言われる懐の深さを再認識すると共に嬉しさを感じた。

(むとう やすのり 防災研究所助手)

## 随想

### 「大学での研究の行方」

名誉教授 庄野 達哉

研究は疑いもなく大学の大きな使命の一つである。しかし同じく大きな使命の一つである教育とは異なり、如何なる理念を以て研究を行っているか、を問われた時に簡潔、明解には答え難いように思う。

新しい学問を創造し、それを進歩、発展させて、以て社会に貢献し、併せて教育にも反映させる、とても答えれば合格点かも知れない。しかし研究者の実際の心情はそれ程単純では無いのではないか。たとえば、研究者個人の知的好奇心を満足させるため、あるいは、優れた研究成果を得ることにより与えられる栄誉の魅力、さらに研究上のライバルとの先陣争い、等々。そこには、云わば人間的な諸々の要素



もある筈である。しかし企業の研究とは異なり、研究を通じて経済的成果を得るという目的は希薄であろう。

ところで、筆者は京都大学を停年で退いてから私立大学に籍を置いて居たが、教育はともかく、研究に関して与えられた環境は京大とは比すべくも無く、したがって第一線に立って研究を継続してきたとは必ずしも云い得ないが、しかし少なくとも第一線で研究を行っている現役の諸君を十分に見聞できる立場には居たように思う。

既に筆者が在職中からその傾向が無くは無かったが、現在、大学の研究の志向する方向は少なくとも七十年代、八十年代とは大きく変わりつつあると思える。既に周知のことであるが、某国立大学教授の現職のままで企業の社外取締役への就任が認めら



れなかったことに対するメディア一般のむしろ教授側に好意的な論調、あるいは国立大学教授が自らの研究成果を実用化するべく在職のまま企業を興すことをむしろ奨励する論調、等々、七十年代、八十年代に同様なことがあったとすれば恐らくメディアの反応は正反対であったろうことは想像に難くない。大学での研究の基本的な重心はあくまで基礎研究にあり、基礎研究に軸足を置きながら応用への展開も視野に入れて研究を行う、これが少なくとも理科系、あるいは筆者の専門である化学の分野での研究の理念の大勢であったと思う。この理念からすれば、優れた成果が得られた時にはその成果を実学的研究へと発展せしめ、さらにその延長線上に自らが起業家と成る選択肢もあり得るはずである。その意味で現在は好ましい方向に動きつつある。

しかし上述したように七十年代、八十年代はそうではなかった。その時代、国立大学は基礎研究に専念し産学交流と云うような実学的要素は全て排除すべきであるとする強い論調が大学内外にあり、我々もそれに多かれ少なかれ束縛されざるを得なかった。その結果として大学の研究が基礎研究を中心としながらも、応用とは逆の方向、すなわち研究者

個人の知的好奇心を満足させることを第一義とする、云わば趣味的な研究の方向に動いたことも事実である。筆者は丁度この時期に、この風潮とは逆に新しい方法論に基づく有機合成化学の新分野の開拓とその発展を研究中であり、実学的な成果も得つゝあったので、研究成果の発表に、時として現在からは想像も出来ないであろう困難を感じる場合もあった。幸いにも筆者らの成果は小さいながらも国のプロジェクトとして開発が行われたので、メディアからの批判を受けることはなかったが、それでも自らの研究成果でありながら、いわゆる縁の下の力持ち的苦渋を味わうこともあった。

このような風潮は六十年代以前とも大いに異なる。その時代はむしろ産学交流、産学協調の全く自由な時代であったと思う。したがって七十年代に入り突如、研究のあるべき方向にコペルニクス的大転回が起ったわけであり、現在九十年代の終わりに再びコペルニクスの大転回が起りつつあるように思う。いずれ二十一世紀の早い時期に、またまた大転回が起るかもしれないが、何人にも予想は出来ない。

(しょうの たつや 元工学部教授 平成5年退官、専門は有機合成化学)

## 洛書

### 「ゴミのもとはどこにある？」

古川 久雄

毎週日曜にカミさんのドライバー兼ポーター役で食料の買い出しに行くのが既に10数年来の習わしである。中学生の頃、話に聞いたアメリカ型ライフスタイルになってしまった。どこでもきれいにパックされた品物が能率よく買える。しかし最近、とんでもなく大量のゴミと無駄に費やされたエネルギーと一緒に買うことに落ち着かない。過剰包装もいい加減にしてくれと言いたい気分だ。デパートの品物など、煎餅やカリントウまでひとつずつくるみ、数個ずつをまた袋にまとめ、何やらカンに入れ、厚紙の箱で包んである。買う時にまた包装紙で包んで更に

ビニールの袋に入れる。煎餅一枚食うのに、何重もの包装をはぎ取り、過剰に費やされた仕事のエネルギーを解凍せねばならない。目のかすんでいる我々世代には袋の破り目を見つけるのすら大変である。食うのはヤメタツということになる。

食料に限らない。ワイシャツ、靴下のピンやセロハン、電気製品の大きなダンボール箱、茶碗、皿、壺の木箱、カメラやビデオの箱とバッファ材、全集本についてくる装幀箱とセロハン、毎日の新聞にドサッとなっている極彩カラーの広告紙。結局、すべて見えないゴミガスとなって空気中に放出される

わけだ。

生ゴミは猫の額程の庭に埋める。夏は分解が速くてたすかるが、冬は我家の庭の面積では処理し切れない。野良猫が徘徊して掘り返し、糞をまきちらす。下駄にくっつけて玄関がくさくなり、カミさんに小言を頂戴する。

猫の額程でも処理スペースがあるのはいい方かもしれない。マンションやアパート、町住まいの人が出さざるをえない生ゴミを石油で焼くのにどれ位エネルギーが費やされているのだろう。

オフィスがまた大変である。パソコンがどんどんモデルチェンジをする。以前居た研究所で不用になったパソコンを集積すると、物置スペース2室が完

全に一杯になった。モデルチェンジを技術革新と喜んではおられない。未熟な不完全商品のローテーションで商売をする姿勢に問題がある。自動ドアや人もいないのに動き続けるエスカレーター、様々なガスをまきちらして走る車など、不完全商品の典型だ。

商品開発の思想が近視眼的にすぎる。豊かさとは何か、もう少し長い視線で考えた本物の商品開発をしてほしい。人間が便利、快適、綺麗を追い求めると、自然はキツイ、キタナイ、キケンと音を上げる。現に上げている。アジアのライフスタイルを創ってくれという吐息も私には聞こえる。

(ふるかわ ひさお

大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授)

## 公開講座

### 終了報告

#### 超高層電波研究センター公開講座 電波でひらく宙空の科学

超高層電波研究センターでは、9月25日(土)宇治キャンパスの本センター会議室において、第2回目(前回、平成7年度)の公開講座を開催した。

この講座は、高校生から一般市民までの幅広い年齢層を対象として、電波を使った惑星間宇宙空間および地球大気環境の研究など、地表から宇宙空間に至る広い範囲の研究を進める本センターの研究成果を広く紹介することを目的とした。

参加者29人の職種、年齢はさまざまであったが、講義内容は好評で、次回の再受講を希望する声も聞かれた。講義題目と講師は次のとおりであった。

宇宙プラズマの不思議  
地球と宇宙の境界を見る  
電波で探る大気の流れ  
電波で送るエネルギー

助教授 大村 善治  
助教授 中村 卓司  
助 手 橋口 浩之  
助 手 篠原 真毅

(超高層電波研究センター)

## お知らせ

## 能 楽 鑑 賞 会

課外教養行事の一環として、日本の伝統芸能の能楽鑑賞会を下記のとおり企画しました。本学学生・教職員各位におかれては、是非この機会に狂言と能楽を堪能してください。

来場をお待ちしております。

## 記

日	時	12月3日(金)
		午後6時00分開場
		6時30分開演
		(開演後の入場はご遠慮願います。)
		8時30分終演予定
会	場	京都観世会館
		京都市左京区岡崎円勝寺町44 ☎771-6114
		(東山仁王門を東へ約300メートル)
演	目	狂言「萩大名」
		茂山 千作
		他
		能楽「百 <sup>ひゃく</sup> 万 <sup>まん</sup> 」法楽之舞
		片山 九郎右衛門
		片山 慶次郎
		他
入 場 無 料		学生証又は職員証等を持参してください。
		定員は550人先着順とします。

